

明倫館だより

第40号
平成15年8月15日発行
発行人 井上晴雄
財団法人 南豫奨学会
南豫明倫館
〒184-8586
小金井市中町 4-18-26
TEL 042-383-9835(代)

心太
からだに伝ふ
波の音
酒井 けい子
廃校の
朽ちゆくまに
合歡の花
中山 孝司
「獅子唐句会」

伝統を誇る、戦後再興五十周年記念の年に 十二名新入寮



平成15年度新入寮生

平成15年度主要行事予定

平成15年

- 4月 1日 自治委員会総会開催
- 12日 寮則説明会・学生部屋回り・やるき茶屋で新人寮生歓迎会
- 19日 学生用風呂給湯ボイラー点検、滅菌装置取替え。同定期点検実施
- 20日 平成15年度第1回常務理事会、新入寮生歓迎会開催
- 22日 学生用トイレ修理、風呂排水口修繕
- 23日 ミタカ電化館内電球取替え
- 5月 4日 学生農園作り開始
- 13日 電気保安協会定期点検
- 26日 監査役会開催
- 28日 事務室用コピー機新機種導入
- 6月 7日 平成15年度第1回定例理事会、同評議員会・OB会開催
- 16日 植木剪定開始
- 27日 第2回常務理事会開催
- 27日 松田哲哉君(農工大4年)風邪・心拍異常で救急依頼
- 7月 9日 定期ガス点検
- 24日 定期消防点検
- 29日 定期浄水槽点検
- 8月 4日 夏季休暇開始
- 16日 夏季休暇終了
- 9月 常務理事会開催予定
- 10月11日 50周年記念南予地区記念式典(於宇和島自動車会館)
- 11月 3日 50周年記念東京地区記念式典(於ホテルニューオータニ)
- 12月26日 冬季休暇開始

平成16年

- 1月 7日 冬季休暇終了
- 2月12日 第1次入寮願書締切予定
- 3月12日 第2次入寮願書締切予定
- 19日 入寮面接選考試験予定(宇和島市)

平成15年度南豫明倫館入寮生

(氏名・大学学部名、出身地、一 自己紹介、二 将来の抱負)

松本 圭司(法政大学・法学部、宇和町)
一 今年度から寮に入ることにしました。一人でも多くの先輩の名前を覚えて、楽しい生活をしていきたいと思っています。

二 一応法学部に進んだので司法試験を受けようと考えています。その過程で必ず司法書士の試験は合格します。

石川 賢(東京大学・教養学部、宇和島市)

一 東京大学教養学部理科一類に行くことになりました。石川賢一です。大学ではテニスサークルに入ろうと思っています。

二 将来の夢は一級建築士です。そのためには工学部建築学科に入らなければいけないので、勉強をがんばりたいと思います。

岡本 光平(電気通信大学・電気通信学部、松野町)

一 ロボットを作りたくてこの進路を選びました。趣味は読書とインターネットです。あいさつ励行そうじ励行でがんばります。

二 当面は、都会の絵の具に染まらないで愛媛に帰る予定です。そしてゆくゆくは、良き父になりたいです。

中山 文記(東京大学・教養学部、御荘町)

一 中山です。親しい友人からはいろいろと言われたりしますが、根はマジメだと自分では思っています。

二 国際経済に興味があり、将来はそれに関連する仕事に就きたいと思っています。

西田 幸平(中央大学・商学部、宇和島市)
一 こんにちは。中大商学部に入學した西田幸平です。分からないことだらけですが、何事にも、一生懸命と向き合いたいと思っています。

二 将来は、鉄道マンになりたいと考えています。そのために、大学でいろいろな勉強、経験をしたいと思っています。

松浦 良(電気通信大学・電気通信学部、吉田町)

一 多くの苦労があり、今春から念願の大学生になれ、本当に良かったと思います。東京での生活は慣れないことばかりなので、よろしくお願ひします。

二 大学の四年を、とても有意義に過ごし、自分の将来の目標を明確にし、心身共に鍛えたいと思っています。

松本 愛則(國學院大学・文学部、松野町)

一 國學院大学の松本愛則です。勉強やスポーツ等、頑張れる事は頑張っていきたいと思っています。よろしくお願ひします。

二 将来は哲学科に基づいた職種に就きたいと思っていますが、別に宅建の取引主任者の資格を取ろうと思っています。

渡辺 徹(拓殖大学・政経学部、宇和島市)

一 テニスと音楽が大好きです。せっかくなので東京にきたのでいろんなことにトライしたいです。

二 将来は貿易関係の仕事につきたいです。そのために資格を取っていききたいです。

永見 賢(早稲田大学・法学部、松山市)

一 小さい頃からサッカーをしています。他にも球技だったら何でもします。また、音楽にも多少興味を持っています。

二 司法試験合格を目指します。弁護士にはなりません。また、いろいろな人と出会って仲良くなっていきたいと思っています。

清水 宏樹(早稲田大学・政治経済学部、松山市)

一 毎日楽しく過ごしています。今はいろんなことに興味があるので、何かと挑戦しようと思っています。よろしくお願ひします。

二 公認会計士を目指していますが、大学でもっと広い視野を身につけて、自分にあった職に就こうと思っています。

宮住 達朗(法政大学・経済学部、松山市)

一 高校時代と同様に、趣味(音楽)と勉学を両立させます。慣れない事がまだまだ多々あるんですが、早く寮に溶け込みたいと思います。

二 大学では自分が心から目指すもののために学び、これからの四年間を夢へのステップにしていきたいです。

友澤 孝規(東京大学・理科I類、松山市)

一 こんにちは。愛光からきました友澤孝規です。今回東大に入學することが決まりました。よろしくお願ひします。

二 将来は感性情報処理、もしくは人間の脳について研究を行いたいと思っています。絶えず向上心、好奇心持っていきたいです。

自治委員長就任にあたって

一橋大(商)三年 安部田 晃久

南豫明倫館の戦後再興五十周年という節目の年に、委員長を務めさせて頂くことを光栄に思います。大きなイベントとしては、今秋開催されます記念式典がありますが、その他委員長として、寮生全員が快適な生活で、寮生同士の積極的なコミットメントを通じて、活発な寮生活が営めるよう、寄与していきたいです。

前委員長の菊地君が、その基礎となるものを築いてくれましたので、新しい委員と共にその発展・向上に尽くせればと思います。

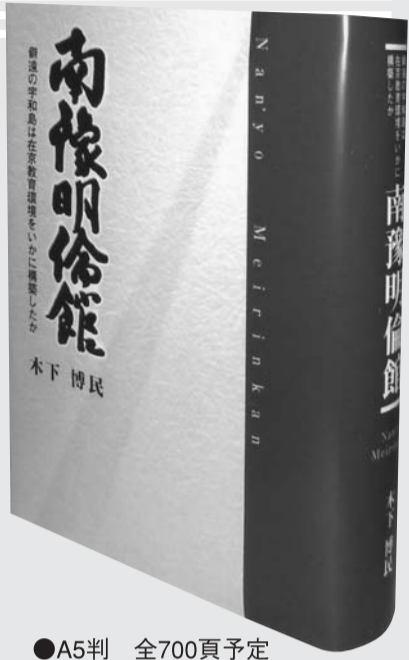
平成15年度上期自治委員会	委員長	安部田 晃久
委員	長	史 晃 佳久 一郎
東副委員長	長	菊地 史 佳久 一郎
西副委員長	長	宮本 紀 計 画 備 報 報
風会企整広	情	松本 細川 藤川 山本 竹田 下原 氏

編集後記

今年南豫明倫館五十周年記念の年、裏面にご案内のように南予では十月十二日(土)、東京では十月三日(文化の日)に記念式典を開催。同時に五十周年記念史『南豫明倫館』が発刊されます。

小金井明倫館入寮生以降の寮生の父兄におかれましては是非この機会に「出席」懇談頂き父兄同士の連帯を強めてください。あわせて南予の絆を強くするための奨学金支援会も発足します。現父兄の懇親会は十月十二日午前九時半より開催の予定。

50周年記念史完成



●A5判 全700頁予定

南豫明倫館

僻遠の宇和島は在京教育環境をいかに構築したか

木下 博民

序章 宇和島藩伊達家「明倫館」

第一章 私立「宇和島明倫館」

第二章 伊達家奨学会

本史

第一部 侯爵伊達家明倫館

第四章 神田南甲賀町時代

第五章 小石川区大塚仲町時代

第二部 南豫明倫館

第六章 再興、財団法人南豫奨学会

第七章 目黒明倫館 初期

第八章 目黒明倫館 中期

第九章 目黒明倫館 後期

第十章 小金井明倫館

終章 あとがき

主要参考文献

年表

人名索引

明倫館で失ってはならぬもの

館史「南豫明倫館」を書き終えて

木下 博民

南豫奨学会の伊達宗禮理事長から、学寮「南豫明倫館」史を書くように頼まれたのは、二〇〇〇(平成十二年)二月六日であった。

そしてようやく、二〇二二(平成三十四年)七月十三日に初稿を仕上げた。通算すると八百四十九日かかったことになる。原稿は七十二万字、単純に日割りすると二日八百四十八文字。所要日数に似た奇妙な数字になる。四百字詰め原稿用紙ならば、一日わずか二枚強。たいした労働といえないかもしれないが、問題は、自分でいいたい資料を収集し、沢山の初対面の方々にはしばしばお会いしなければならなかったことである。

要望されたのは、「南豫」を冠した戦後五十年間の明倫館史ということであったが、どう考えても旧宇和島藩の子弟を東京に遊学させたときの環境から述べなければ、たまたま辺境に生まれた青少年に、安心して先進的教育環境を提供せんとした設立主旨が、理解できないうちにおもわれた。

さらに、その土壌として、あえて「明倫」と称した藩校や、明治以降の宇和島における教育にまで遡らなければならないことが、徐々に判ってきた。断つておくがわたしは、高等教育をうけられる家庭境遇にはなく、ようやく市立宇和島商業学校を終えたに過ぎなかった。幸いにして商業学校も、後半の三年間、伊達奨学金貸与制度の恩恵に浴した。館史を書くことがその報恩であり、作業の原動力であった、「あとがき」には記しておいた。

このかなりの枚数を、わずかな時間で片付けた拙速を、識者は嘲笑するだろう。しかし、二〇〇三(平成十五年)年の再興南豫明倫館五十年記念に間に合わせてほしいといわれれば、無謀ともわかれながらも、あつさりと思慮してしまつた。プロのライターでもない素人の、怖いもの知らずであつたかもしれない。

記述期間は、藩校を明倫館と改めたときから通算しても百八十三年間になる。歳月とともに、環境も関係者の価値観も、著しくちがつている。いうまでもないことである。

もし、明治の神田南甲賀町時代の明倫館館生が、突然、小金井の整備された南豫明倫館を訪れたならば、館生たちの素晴らしい科学的知識には、とても口を挟む余地はない。しかし、ふれあう人間同士として、なにかを見失っていることを、痛感するにちがいないだろう。

それは「明倫」である。今日の青少年には、社会人として、まず相手の立場を理解する、いや、しなければならぬ躰が、少し欠けているように思われてならない。

とくに戦後は、それまでの価値観すべてを、「悪」と決めつけた。それはどうしようもないとしても、邪魔なものとして古草履のように、簡単に打ち捨ててしまった。やがては、このことに気付く館生ももちろん現れるだろうが、そこまで行くには、まだまだしばらくかかるにちがいない。

長い年月を掛けて培われてきた日本人の道徳規範が、壊滅しかけたのは、この半世紀ばかりではなかった。無血革命にもひとしかつた明治初期にも、同様の危惧が起つていく。

怒涛のように進入した洋学によって、漢学中心の教育が崩れそうになったことがあつた。しかも、当時文部省の定める中等教育体系は、猫の目のように改組されて定まらず、南豫でもその影響をまろにうけていた。

漢学は、たんに四書五経の字句解釈ではなく、人倫とは、生きるための秩序とはなにかを解き明かす学問、「明倫」そのものである。漢学すなわち道徳学であつた。

宇和島第七代藩主であつた春山伊達宗紀は、すでに隠居の身であつたが、道徳規範の廃れるのを憂へ、漢学者加藤自謙に命じて私塾「継志館」を、横新町の旧商社跡に創設させた。

(一八八二(明治十四)年のことである。)

翌一八八二(明治十五年)年十一月、ときの愛媛県県令関新平が、地方視察で宇和島にやつてきた。競つ

て子弟が入塾している継志館の盛況を見て、大いに感激し、右大臣倉具視に報告した。このことは、直ちに報聞に達した。たちまちこれを賞して、伊達宗紀は従三位に昇叙した。

明治天皇は、侍講の漢学者元田永孚から、徹底した道徳教育を受けていた。この前年、民情を学ぶために各地を巡幸し、直視した農漁村と比べて、身辺に勤勉の風が失われつつあることを痛感した。儉約を率先するとともに、「勤儉の詔勅」をださせたほどであつた。

後年(一八九〇(明治二十三年)十月三十日)、この信念が「教育勅語」となつたことは周知のとおりである。

話が反れる。教育勅語が軍国主義に走つた源流でもあるかのように唾棄されるのは、真意を理解しようとしめない、甚だしい愚行である。全文明倫を唱へ、「和」の精神で貫かれており、他を誹謗し侵略しなどとは、二言も述べられていない。

ただ、「巨鯨急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」を、戦争になれば天皇のために死を賭して戦えと曲解しては、いかに「非常事態が起れば、真心をもつて国の平和に奉仕しなければならぬ」とである。

早速、文部省は伊達宗紀の支援した加藤自謙の継志館を讃えて、全国の学校へ通達している。

「継志館ハ伊豫宇和島ニ在リ。全クノ私学校ニシテ、専ラ漢学ヲ修ムル学校ナリ。始メ宇和島旧藩主伊達宗紀氏、深ク方今(この頃)の意、修身道徳ノ衰ヘタルヲ歎ジ、方今ノ校長加藤自謙ヲ撰ビ、一年二百四十円ヲ補助シテ此学校ヲ開キシモノナリ。学科ハ読書作文課外ノ三科ニ分チ、豫科一年・本科二年半ノ学期トス。課外用ノ書籍ハ四書・小学・詩経・書経・和漢ノ歴史・靖献遺言・通議ノ類ヲ用ユ。現今生徒百五十六人アレドモ、小中学ノ生徒ノ定課外ニ来ル学者多ク、専門修行ノ者、少シト言ウ方今功利ノ風地方ニ波及セル折柄ナレバ、此学校ノ設立ハ人心風俗ニ必要ノモノナルベシ」

修身道徳の衰えんとしていることは、いまも決して例外ではない。当時、それを憂へ全国に率先して、この種学校を運営したのが、なんと宇和島であつたのである。

修身道徳などと、古いことばを大上段に振りかざせとはいわないが、せめて自己中心的な行動から脱して、つねに相手をおもひばかり、礼儀正しく、さらに和の精神に徹した学生の、勉学修養の場として、南豫明倫館が、継志館のように全国の規範となり、次代へ向かつて存続発展することを願つてやまない。

(一〇〇二・一八・三)

参考文献

「伊達宗紀公伝」 兵頭賢一著(未刊、ただし刊行予定あり)

東京と宇和島で盛大に記念祝賀会開催

―父兄・OBともに多数ご参加をお待ちしています―

南予会場

日時 平成15年10月11日(土)
午後1時から

場所 宇和島自動車会館5階宴会場
宇和島市錦町3丁目22番

電話 0895(22)2202

会費 15,000円

東京会場

日時 平成15年11月3日(文化の日)
午後12時30分から

場所 ホテルニューオータニ翠鳳の間
(本館1階・宴会場階)
東京都千代田区紀尾井町4丁目1番

電話 03(3265)1111

会費 20,000円

財団法人南豫奨学会 奨学金支援会」が発足致します。

平成十六年度より、南豫明倫館戦後復興五十周年を記念して、財団法人南豫奨学会「奨学金支援会」が発足する予定です。

明治から終戦まで財団法人伊達奨学会が実施してきた奨学事業の精神を、二十世紀に生かし、新たに南予地区出身子弟のための奨学金の給付と事業を行うため、今後南予関係者に幅広く奨学金支援を仰ぐとするもので、詳細は記念式典当日発表の予定です。